

母子の適合（マッチング）と母親の育児意識の関連  
～ 縦断調査により、母子の関係性の変化に着目して～

立命館大学大学院  
応用人間科学研究科  
対人援助学領域  
発達・福祉臨床クラスター

筆者は 2000 年に「母子の適合（マッチング）と育児自信の関連」というテーマで調査研究を行なった。産後 1 ヶ月の母親に対してアンケート調査を行ない、児の気質的特徴という児側の要因と母親意識という母親側の要因を取り上げ、その相互作用による母子の適合（マッチング）の関連と、さらにマッチングと母親の育児自信との関連を調べた。その結果、児の気質的特徴も母親意識もそれぞれの要因がマッチングに影響していること、またそのマッチングが母親の育児自信にも大きく関与していることが示された。しかしそれはあくまでも産後 1 ヶ月という一時期の結果であって、筆者自身はその後それぞれの母子がその関係性をどのように変化させているのかということに関心がある。そのため今回は、前回調査と同様の調査対象群をターゲットとし、この 4 年間の変化を後方視的に検討するという形で研究をすすめた。

母子の関係性を探る上で、前回調査同様「マッチング」という語をキーワードとした。これは母親側の要因と子ども側の要因がマッチしているのかマッチしていないのかといったことを想定したものである。4 年前の前回調査も今回調査も、共に母親側の視点からの母子関係に着目している。そのため、この「マッチング」とは、母親自身が子どもに対して抱いている、子どもと相性が合っている、波長があっている、気持ちが通じ合っている、一体感がある、といった主観的で意識的なものを想定している。

本研究では、2000 年に行なった前回調査と同様の対象者に調査を行ない、現在までの 4 年間のうちに、母子の関係性がどのように変化しているのかを探ることを目的とした。

前回調査と形式を同じくして、出産後 4 年経過した現在の対象者の生活状況や母子関係の状況といった全体像を知るための調査 1（アンケート調査）と、母子の関係性に影響する要因をより深く探るための調査 2（面接調査）の二本立てで行なった。2000 年 6 月から 9 月に国立 O 病院（現在の「独立行政法人国立病院機構 O 医療センター」）で出産した母親 238 名を対象に調査協力依頼をし、調査 1 では 43 名、調査 2 では 13 名の協力が得られた。

調査 1 においては、アンケート調査にて、現在の生活状況や家庭環境、育児協力の状況といったものを把握し、尺度を用いて母親側から見た母子のマッチング、母親自身の母親意識、母親の育児不安を測定した。マッチング、母親意識、育児不安は互いに関連を示していることが示された。それは産後 1 ヶ月の調査で得られた結果と同様のものではあった。今回の質問紙の回収率から見れば信頼性は低いのもかもしれないが、前回調査と今回調査で同様の結果が得られたということは、マッチング、母親意識、育児不安の三者間には何らかの関連があり、またその関連というものは、出産後初期の段階から時間を経ても比較的

継続されて存在しているのかもしれないということが考えられる。その一方で、このマッチングと母親意識と育児不安というものは全く別々の意識のようでありながら、実は同一の、もしくは似かよった意識なのかもしれないということも考えられ、その点は今後検討していく必要があると思われた。

調査2においては、面接調査にて、個々の育児を振り返りながら、母子の関係について母親自身に語ってもらい、その語りを分析した。マッチングというもの自体あまり意識できない、考えたこともないという意見が多かったのだが、深く探っていく中で、若干の共通性が見出せた。子どもと相性が合っているといった感覚をよく分からない、感じないとする母親の場合、比較的安定して育児に関わることができており、逆に子どもとの相性を実感していた母親の場合、育児に困難をきたした経験をもっていることが分かった。その中間的な立場、あえて言うならばあるのかもしれないといった意識をもつ母親の場合、きょうだいなどの間で複数人の子どもを比較して、こちらの方があちらよりも合うとか合わないとかいったように相対的なものとして感じているということが分かった。いずれにおいても、母子の関係性とは、筆者が最初に想定していたような、比較的固定的で継続的なものではなく、容易に変化するものであるということが示された。またその変化において特別なきっかけといったものもないことが多く、そういったものは母親にとっては意識されにくいものであることが分かった。

今回のアンケートにおいては、一般的にいうところの母子の相性や、自分と子どもの相性といったものが「あると思う」と回答したものが比較的多かったが、面接で実際に聞き取りを行なってみると、そういったものは意識したことがない、考えたことがないという者が多いという結果であった。今回の調査では、「マッチング」というものを説明する語として「相性」という言葉で代用した。筆者にとってはこの2つの語は同等のものとして扱ったのであるが、実際に対象の母親たちに確実に伝わっていたかということは疑問である。的確な語句の説明、詳細な定義づけというものが必要であったことを実感している。また今回は、自分ではあまり意識しないけれど、他者の話を聞いているとそういったことがある、他の親子を見ているとそういったものを感じるとした母親が多かった。その点に関しても今後検討していく余地があるのではないかと考える。